

フィヒテとフンボルトの大学理念 (Die Idee der Universität)



Johann Gottlieb Fichte (1762-1814)



Wilhelm von Humboldt (1767-1835)

「〔高校までの〕学校というものは出来あいで解決済みの知識を教え学ぶ場所であるのに対して、高等教育施設〔=大学〕は、学問をつねにまだ完全に解決されていない「問題」として、したがって絶えず研究されつつあるものとして扱うところにその特色をもつものである。…すなわちここでは、教師は学生のためにそこにいるのではなくて、教師も学生も、学問のためにそこにいるのである」(Humboldt 1810=1970:210)。

「われわれが学問を学ぶのは、一生涯いつでも試験に備えて、学んだことをそのまま言えるようにしておくためではない。そうではなくて、学んだことを人生の来たるべき場合に 応用するためであり、したがって学んだことを一つの働きに変えるためである。学んだことをただ繰り返すのではなく、学んだことから、また学んだことでもって、何か別のものを作り出すためである。したがって究極の目的は決して単なる知識ではなくて、むしろ知識を駆使する技法にある」(Fichte 1807=1970:14)。

「試験。ただし知識を測るのではなく技法を測る試験。後者の目的からすると、学生が聞いたり読んだりしたことの再現を答案として要求するような試験問題は、不相当であり目的に反する。むしろ問題は学んだことを前提として、この前提を応用して何かの具体的な結論を出すことを答えとして要求するようなものでなければならない」(Fichte 1807=1970:19)。

「ゼミナール。学園生活のあちこちで目に見えないかたちで行なわれているいくつかの対話のなかにあって、ある問題について学生が質問し教師が反問して、そこにはっきりしたソクラテス的な対話が成立する場である」(Fichte 1807=1970:19)。

「レポート。これもつねに技法を学ばせる目的でなされる。したがって学んだ知識をそのまま再生するのではなく、それから何か別のものを生みださなければならない。したがってそれは、学生がその知識をどれだけ自分のものにし、あらゆる応用の道具として身につけているかを明示するようなレポートでなければならない」(Fichte 1807=1970:19)。

出典

フィヒテ「ベルリンに創立予定の、科学アカデミーと緊密に結びついた高等教授施設の演繹的プラン」(1807年)『大学の理念と構想』(明治図書、1970年。ただし訳文は自由に改変)

フンボルト「ベルリン高等学問施設の内的ならびに外的組織の理念」(1810年)『大学の理念と構想』(明治図書、1970年。ただし訳文は自由に改変)